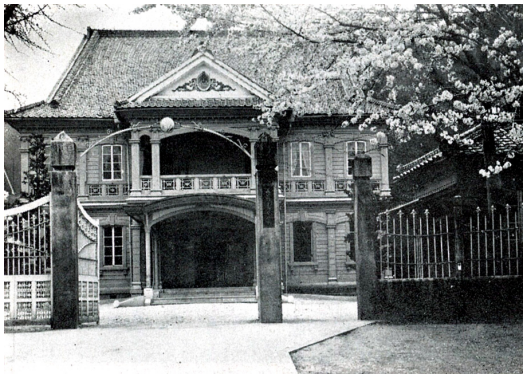
山口高等商業学校成立

旧旧山高からの転換



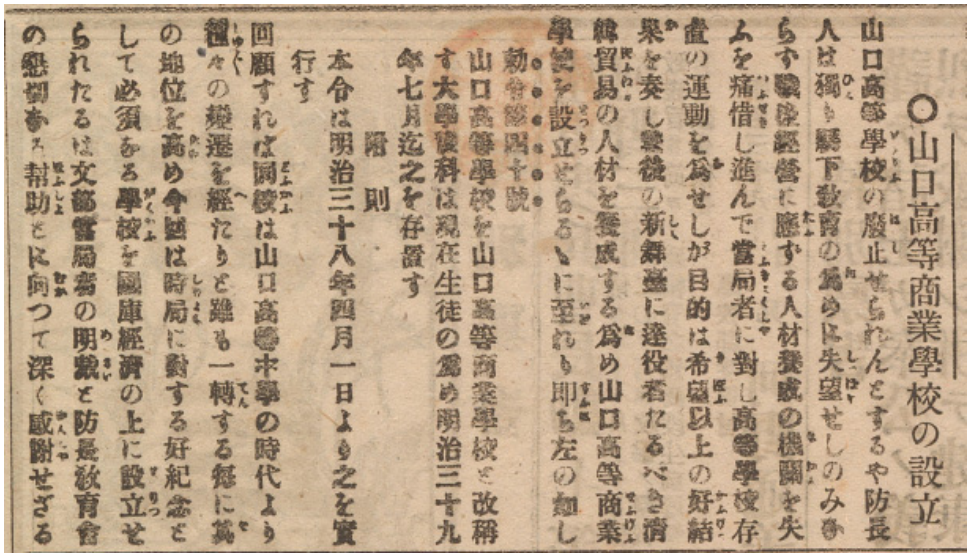
旧旧山高から引き継いだ校舎本館

山口講堂以来約90年間、中学校、高等中学校、高等学校と比較的順調な歩みを続け、常に新しい教育制度の先頭に立ってきた官立山口高等学校（以下「旧旧山高」という）は、明治30年代後半に大きな転換期を迎えた。

全国的な高等教育熱の高まりにともない、文部省が入学制度の統一を図ったため、旧旧山高には県外からの入学生が急増した。発足時に過半数を超えていた県内出身者は、明治37（1904）年には全体の2割まで落ち込み、設立の際の「県民のための高等教育機関」という主旨に合わなくなった。また、学生数増加は運営費を負担していた防長教育会の財政問題にも大きな影響を与え、さらに校舎修繕や改築などの多大な出費が見込まれたことから、同会では将来計画に苦慮し、旧旧山高の国庫移管を文部省に申請した。

一方、国内では日清戦争後の産業界の驚異的発展にともなって、各種産業に科学的知識や技術を有する人材の供給が急務となり、実業教育振興の機運が熟していた。相次いで各種実業学校が設立され、明治36年には「専門学校令」が制定された。

旧旧山高の国庫移管について紆余曲折の末、政府は実業専門学校の配置計画と大陸に近い山口県の地理的関係とを考慮し、その校種を「高等商業学校」に変更することを明治37年10月に閣議決定した。これを受けて、防長教育会では同校に属する土地、建物など一切の財産を寄附し、3年間は維持費等9万5千円の寄附を確約し、協議が成立した。こうして旧旧山高は防長教育会の手を離れ、官立山口高等商業学校となった。



○山口高等商業學校の設立

山口高等學校の廢止せられんとするや防長人は獨り縣下教育の爲めに失望せしのみならず職後經營に應ずる人材養成の機關を失ふを痛惜し進んで當局者に對し高等學校存置の運動を爲せしが目的は希望以上の好結果を奏し戰後の新舞臺に進役者たるべき清韓貿易の人材を養成する爲め山口高等商業學校を設立せらるゝに至れり即ち左の如し

勅令第四十號

山口高等學校を山口高等商業學校と改稱す大學豫科は現在生徒の爲め明治三十九年七月迄之を存置す

附則

本令は明治三十八年四月一日より之を實行す

回顧すれば同校は山口高等中學の時代より種々の變遷を經たりと雖も一轉する毎に益々の地位を高め今回は時局に對する好紀念として必須なる學校を國庫經濟の上に設立せられたるは文部當局者の明斷と防長教育會の懇切なる幫助とに向つて深く感謝せざる

山口高等商業学校の設立を伝える新聞記事（「防長新聞」明治38年2月28日）

官立で全国３番目

明治38（1905）年4月、山口高等商業学校（以下「山口高商」という）は、東京高商、神戸高商に次いで日本で3番目の高商として誕生した。

同じ明治38年誕生の長崎高商より一足早かったわけだが、全国で3番目にできた高商ということが山口高商生の誇りであり、名声を高らしめる大きな要因であった。

日露戦争も終結近く、国を挙げて戦後経営の必要性が増す中で、この高商への転換は重要な意義を有し、山口高商の使命も大なるものがあった。

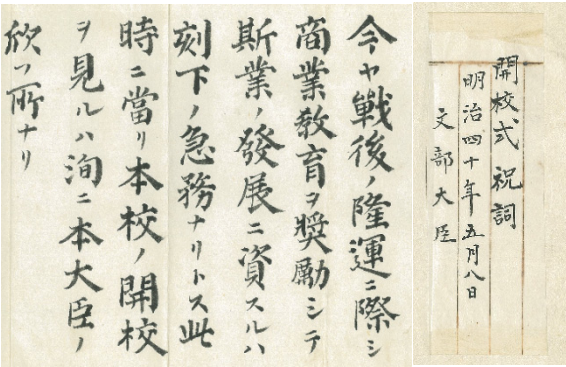
東京高商	明治20年
神戸高商	同35年
山口高商	**同38年4月**
長崎高商	同38年9月
小樽高商	同43年
台北高商	大正　8年
名古屋高商	同　9年
福島・大分高商	同10年
彦根・和歌山・京城高商	同11年
横浜・高松高商	同12年
高岡高商	同13年
大連高商	昭和16年

官立高等商業学校と設立年

町を挙げての歓迎

開校式は、明治40年5月8日に挙行された。5月8日は明治38年に第1回の入学式を行った日で、この日をもって開校記念日と制定した。防長教育会会長、山口県知事ほか130余名の来賓を迎え、午後3時から式を開始。

正門は若葉のアーチで飾られ、夜はイルミネーションが校舎を浮き上がらせ、花火が打上げられた。午後7時から、職員生徒に来賓を加え、高商の二文字を描いた提灯を手に4時間に及ぶ市内行列を行った。一時は廃校の危機に直面した旧旧山高が、一転して高商という時代の花形に生まれ変わったことで、地元の喜びもひとしおだった。


開校式祝詞
明治四十年五月八日
文部大臣
今ヤ戦後ノ隆運ニ際シ
商業教育ヲ奨励シテ
斯業ノ發展ニ資スルハ
刻下ノ急務ナリトス此
時ニ當リ本校ノ開校
ヲ見ルハ洵ニ本大臣ノ
欣ノ所ナリ

文部大臣の祝辞（抜粋）

開校式記念撮影